

りそな 経済フラッシュ

(ECB <欧州中央銀行> 理事会)

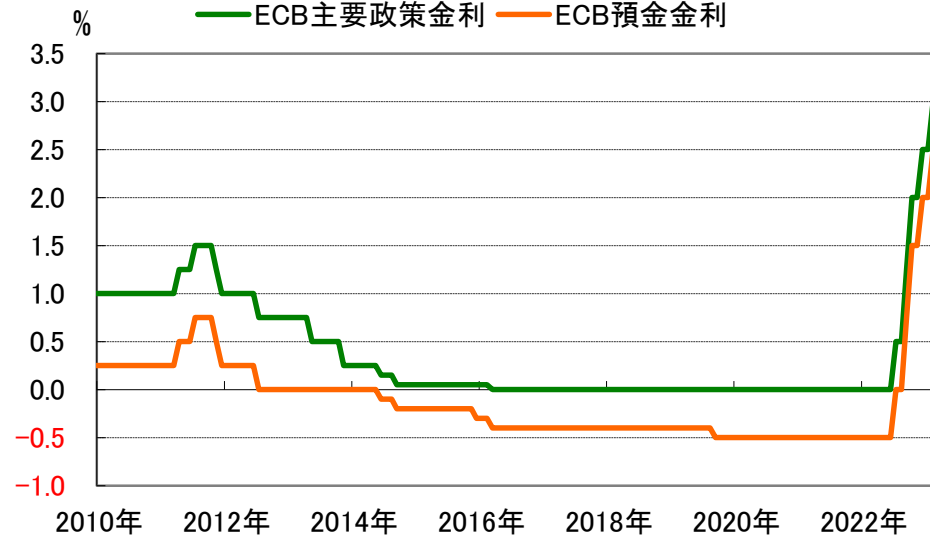


○概況

- ◆ ECB理事会は5会合連続での利上げを決定。利上げ幅は前回と同様の0.50%。声明文で次回(3月)の0.50%利上げを事実上予告した。
- ◆ 一方、その後は金融政策の道筋を再評価するとしたことで、利上げ停止シグナルとの解釈が広がり、欧州金利低下・EUR安が進行

- ✓ 2月2日に開催されたECB(欧州中央銀行)理事会では5会合連続での利上げを決定し、預金ファシリティ金利を2.50%、主要政策金利を3.00%、中銀貸出金利を3.25%へそれぞれ引き上げた。利上げ幅は前回(12月)と同様の0.50%とし、インフレ率を2%に戻すため、更なる利上げを想定していると表明した。声明文にて次回(3月)の会合で更に0.50%の利上げを行う「意向」と明記。事実上の利上げ予告であり、異例と言える。一方、その後は金融政策の道筋を評価すると記載した。
- ✓ 2月、3月の0.50%利上げは前回理事会後の記者会見でラガルド総裁が示唆しており、市場でも概ね織り込まれていた。ただし声明文に利上げ幅を明記した点は、「データ次第」「会合毎に検討」としていた、これまでのスタンスと一線を画す。
- ✓ 記者会見で、ラガルド総裁は利上げは完了していないと述べた一方、3月利上げに関する「意向」は撤回不可能ではないとも発言。3月ECB後のスタンスについて、金融政策の道筋を再評価するとしたことと合わせて、市場では、利上げの終了を示唆すると解釈された。
- ✓ また前日のFOMC(0.25%利上げ)や直前のBOE(0.50%利上げ)が中央銀行のハト派転換を意識させる内容であったこともあり、ECBとラガルド総裁のメッセージがハト派的に解釈されやすい地合いにあったと言える。ラガルド総裁の発言中に欧州金利が急速に低下し、為替市場ではEURが下落した。
- ✓ ユーロ圏は暖冬の影響により想定されていたほどエネルギー問題が深刻化せず、経済状況は最悪期を脱した可能性はある。一方で足元では食品・エネルギーを除くコアインフレ率も徐々に上昇しており、賃金上昇によりインフレ粘着化する可能性も高まっている。ECBの難しい舵取りは続く。

【ECB政策金利と預金金利】



【ECBスタッフ見通し(12月時点)】

	2022年	2023年	2024年	2025年
実質GDP成長率	+3.4	+0.5	+1.9	+1.8
9月時点の見通し	+3.1	+0.9	+1.9	-
HICP(消費者物価)	+8.4	+6.3	+3.4	+2.3
9月時点の見通し	+8.1	+5.5	+2.3	-

前年比、%

【出所】ECB、Bloomberg

◎注意事項

本資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。

お問い合わせは、取引店の担当者までご連絡ください。